

# 「私たちががんばる」

## 筑紫女学園 弁当作り居宅訪問

「お年寄りには薄味の方が良いよね」「福岡のがめ煮（筑前煮）はおじいちゃんに喜んでもらえるやろか」

2月22日、岩手県花巻市の「とうわボランティアの家」（3面に関連記事）には、弁当作りにいそしむ女子大生の元気な声が響きわたっていた（写真）。フライパンや包丁を握り、調理する顔はどれも生き生き。料理の得意な学生がリードし、卵焼きやかぼちゃの煮物などを分担。「私たちにできることでお役に立てればそれだけでうれしい」と笑顔が咲く。

弁当作りに励むのは2月20日から5日間、ボランティアのため同施設を訪れた宗門関係・筑紫女学園大学（福岡県太宰府市）の学生20人。同大学の来訪を



聞き、「お年寄りに心尽くしの手料理の届け先は、沿岸部の大槌町から避難し花巻市街の借上げ住宅で生活する一人暮らしの高齢者たち。

ゆいっこ花巻」（増子 学生2人ずつが、ゆいっこや同施設のスタ

ッフとチームになり、それぞれ担当の居宅に出発。学生たちはパツクに詰めた弁当を大事そうに抱えながら、緊張した面持ちで戸口から訪問を告げた。

人間福祉学科2年の三浦珠実さんと木内陽子さんが訪れたのは、大槌の港町でラーメン店を営んでいた70代の女性。同行した60代女性スタッフも同町出身で、ともに家や店を大津波で失った。自己紹介の後、女性スタッフは夫がまだ見つからないことを明かした。

2時間の滞在中、大槌の女性2人は、大槌の町、海、花巻の暮らし：若者に多くのことを語った。「なぜ私だけがこんな目に」「大好きな歌を口ずさむだけで『家族を亡くしたのに』と言われる」。そして、「もう死にたい」と思った」。時折落ち着きを取り戻しながらも、やり場のないいら立ちや悲しみを漏らす隣で、学生たちは大粒の涙をこぼ

し、ただうなずくだけだった。

支援物資のピンクのセーターを着ていた70代の女性は「でも、よく来てくれたね。ありがとう。これ着てたらお嬢さんたちと姉妹みたいでしょ」と顔をほころばせ、冷蔵庫から東北の海で採れた海苔の佃煮を差し出した。

学生は「泣いていいのかわからなかったけど、涙が止まらなかつた。遺族、被災した人それぞれに違う悲しみがあって、『何万人が被災された』というどんな報道よりも、たった一人の話を伺うことに重みを感じた。元気にさせなければと聞いていたけど、ただ聞くだけで力になれるんだと思った。こっちにきて、『がんばって』から、『私たちががんばります』に変わった」。アパートの玄関で別れを告げた彼女たちは、潤んだ目で口をそろえて語った。

今月中旬には2回目を実施される。多くの学生が「また来たい」と語っていた。